



市之代遺跡 チョッパー

平成17年10月25日(火)
～12月22日(木)

午前10時から午後4時30分まで(入館は午後4時まで)
入場無料 月曜休館 11月3日と23日の祝日は開館します。

講演会 12月3日(土)午後1時30分より

「相澤忠洋と岩宿の発見」

相澤忠洋記念館館長 相澤千恵子氏



茨城県教育財団提供 柏原遺跡調査風景

展示遺跡

- 水戸市十万原遺跡
- 土浦市寺畑遺跡
- つくば市中原遺跡
- 牛久市西ノ原遺跡
- 龍ヶ崎市沖餅遺跡
- 取手市市之代遺跡
- 取手市柏原遺跡
- 取手市大山遺跡
- 取手市東原遺跡



大山遺跡 尖頭器

人間の発見

常総台地の旧石器文化

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 取手市吉田383 TEL 0297-73-2010 FAX 0297-73-5003

人間の発見 —常総台地の旧石器文化—

ヒトはものを握る能力を生まれつきもっている。その能力によって石を握り道具としてものを叩き、切断し、割るという技術を習得して人類の歴史を歩みはじめた。

1946年（昭和21）の群馬県岩宿遺跡において相澤忠洋は、それまで日本には存在していないと考えられていた旧石器文化を発見した。この発見により日本の歴史は数万年という単位でわれわれの祖先の起源をさかのぼることになったのである。

かつて存在しないと考えられていた旧石器時代遺跡もいまでは全国に5,000ヶ所以上が発見されている。茨城県では1970年の高萩市赤浜遺跡が最初の発掘である。それいらい県内でも旧石器研究はすすめられひたちなか市後野遺跡のように細石刃文化やこれに続く大型石器文化と初源土器との組合せなど重要な発見があった。現在では茨城県内でも500ヶ所をこえる遺跡が確認されている。取手市では1996年に柏原遺跡が発掘され、県南地方の細石刃石器文化があきらかとなった。さらに水戸市十万原遺跡や土浦市寺畑遺跡などから3万年以上前と思われる遺跡が発見されている。これらの資料をならべてみると人類の数万年の歴史が「握る」という才能から出発した長い「学習の過程」であることに気づく。

今回の展示はようやく充実してきた県南地域の旧石器文化の資料をもとに、縄文時代にいたるわれわれの祖先の歩んだ道筋をたどってみたい。

平成17年10月

取手市埋蔵文化財センター

講演会「相澤忠洋と岩宿の発見」

日時 12月3日（土）午後1時30分より

定員 40名（当日受付順）

場所 取手市埋蔵文化財センター2階講座室

講師 相澤忠洋記念館館長 相澤千恵子氏



相澤忠洋氏（相澤忠洋記念館提供）

例 言

1. このパンフレットは平成17年10月25日から12月22日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第17回企画展「人間の発見 常総台地の旧石器文化」にともない発行されたものです。
2. 企画・編集は埋蔵文化財センター宮内良隆が担当しました。
3. 編年案・遺跡各説は水戸市教育委員会生涯学習課文化財保護主事川口武彦氏が、宮内の依頼によって執筆しました。編集の都合で原稿を変更した箇所があるので誤りがあれば編集の責任です。

開催にあたり、相澤忠洋記念館、水戸市教育委員会、牛久市教育委員会、土浦市教育委員会、つくば市教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会、龍ヶ崎市歴史民俗資料館、茨城県教育財団、相澤千恵子、飯野雄一、張替孝男、藤田哲也、山本賢一郎、鴨志田篤二、佐藤正好、由利毅、黒澤春彦各位からご協力、ご指導、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称は略させていただきました）

取手市内の遺跡

柏原遺跡（かしわばらいせき）

取手市野々井字柏原

標高20～23mの小貝川右岸の台地上にある。1996年の発掘調査において、削片系細石刃石器群の石器製作跡が4ヶ所見つかっている。この石器群の石材には東北地方日本海側で産出する第三紀女川層を起源とする硬質頁岩が利用されており、この石器群を残した人々は東北地方と関東地方を狩猟しながらいたりきたりする生活をしてきたと考えられている。

削片系細石刃石器群が出土する遺跡からは、狩猟具の部品である細石刃がたくさん出土することから当時の人々は狩猟を主な生業としていたと考えられているが、河川や湖沼に近い場所からも遺跡が発見されることから、内水面漁撈（河川や湖沼における漁撈）が行われていたとする見解もある。

しかし、石器が出土する関東ローム層は有機物を融かしてしまう酸性質の土壌であることから、動物遺存体（腐らずに残った動物の骨や歯など）はほとんど出土しない。同じ削片系細石刃石器群が分布するシベリアの遺跡から出土する動物遺存体の例を見ると、魚骨もあるが、サケ科など遡河性の魚骨の出土例は極めて稀で、最も多く出土するのはヘラジカやトナカイといった移動性の高い大型獣の遺存体である。このようなシベリアの事例から類推して、列島の削片系細石刃石器群もシカのような移動性の高い動物の追跡猟のために開発された狩りの装備であったとする見方の方が強い。

柏原遺跡の石器群の内容について見ると、総点数233点の石器のうち最も多いのは104点の細石刃であり、そのほかに細石刃を剥がした細石刃石核が2点出土している。また、細石刃石核を調整する際に生じた剥片で製作された荒屋型彫刻刀形石器や削器などの加工具も出土している。しかし、数千点や数万点の石器が出土するような遺跡に比べれば、決して多いとは言えない。

石器の量が少ないのは、遺跡での滞在期間がさほど長くなかったことが深く関わっていると考えられ、シカのような移動性の高い資源を対象とした追跡猟のために可能な限り軽量の装備を保持していたこと、長距離の移動生活を送る中で石器を大切に利用する工夫が行われていたことも密接に係わっていると考えられる。

このように柏原遺跡の削片系細石刃石器群は、長

距離の移動生活を実現するために最終氷期の人々が編み出した携帯性を追求した技術の到達点と評価することができる。その年代はB.C1.4～1.3万年頃である。

本遺跡からは削片系細石刃石器群のほかにも珪質頁岩製の茂呂型ナイフ形石器や流紋岩製の涙滴形ナイフ形石器、ガラス質黒色安山岩製の男女倉型尖頭器、珪質頁岩製の有舌尖頭器2点（隆起線文段階）なども出土しており、B.C2.6年からB.C1.3万年前まで断続的に旧石器時代の人々による土地利用が展開していたことがうかがえる。

大山遺跡（おおやまいせき）

取手市寺田字大山

小貝川支流の相野谷川ぞいの標高20～22mの台地北縁部にある。1996年の発掘調査（第一次調査）で、ホルンフェルス製のナイフ形石器とガラス質黒色安山岩製の有舌尖頭器が採集されている。

ナイフ形石器はその正面形態や調整加工の在り方から牛久市西ノ原遺跡やつくば市中原遺跡の資料と同じくB.C2.6万年頃と考えられる。

ガラス質黒色安山岩製の有舌尖頭器は、縄文時代草創期（隆起線文段階）のものであり、縄文時代草創期には狩り場としての土地利用が展開していたことが想定される。

2000年の第二次調査では、硬質頁岩製の槍先形尖頭器が採集されている。この槍先形尖頭器は神子柴型尖頭器と呼ばれる尖頭器の一種で、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけて出現する大形の槍先形尖頭器である。長野県神子柴遺跡から一括出土した尖頭器を標識資料とし、長さは数10cmから20cmを越えるものもある。両端が折れていることから全体の形状については想定域を出ないが、両端が鋭く尖り、基部近くに最大幅をもつ月桂樹葉形を呈していたと考えられる。押圧剥離を施し、丁寧に薄く仕上げられている。

東原遺跡（ひがしはらいせき）

取手市野々井字東原

小貝川支流の相野谷川ぞいの標高20～23mの台地上にある。1996年の発掘調査で、黒曜石製の槍先形尖頭器とチャート製の有舌尖頭器が採集されている。黒曜石は漆黒で透明度が低く、内部に橙色や褐色の混入物が含まれるという、肉眼でもはっきりわかる特徴から、栃木県矢板市にある高原山産のものともみられる。有舌尖頭器は縄文時代草創期（隆起線文段階）のものであり、縄文時代草創期には狩り場としての土地利用が展開していたことが想定される。

市之代遺跡 (いちのだいせいせき)

取手市市之代

1997年の農業整備事業にともなう確認調査で市之代古墳群10, 17~21号墳の周辺から安山岩製の打製石斧と礫器がそれぞれ1点ずつ出土している。打製石斧の形がひたちなか市武田西塙遺跡第I文化層や坂東市拾二ゴゼ貝塚から出土した石器とよく似ているので同じ時期のものであれば取手市内で最も古い(B.C2.7万年頃)石器である。

また、2003年に行われた6号墳の確認調査においてもEトレンチからガラス質黒色安山岩製の打製石斧が1点出土している。

※遺跡名のないものは全て柏原遺跡出土

県内周辺の遺跡

十万原遺跡 (じゅうまんはらいせき)

水戸市藤井町字十万原

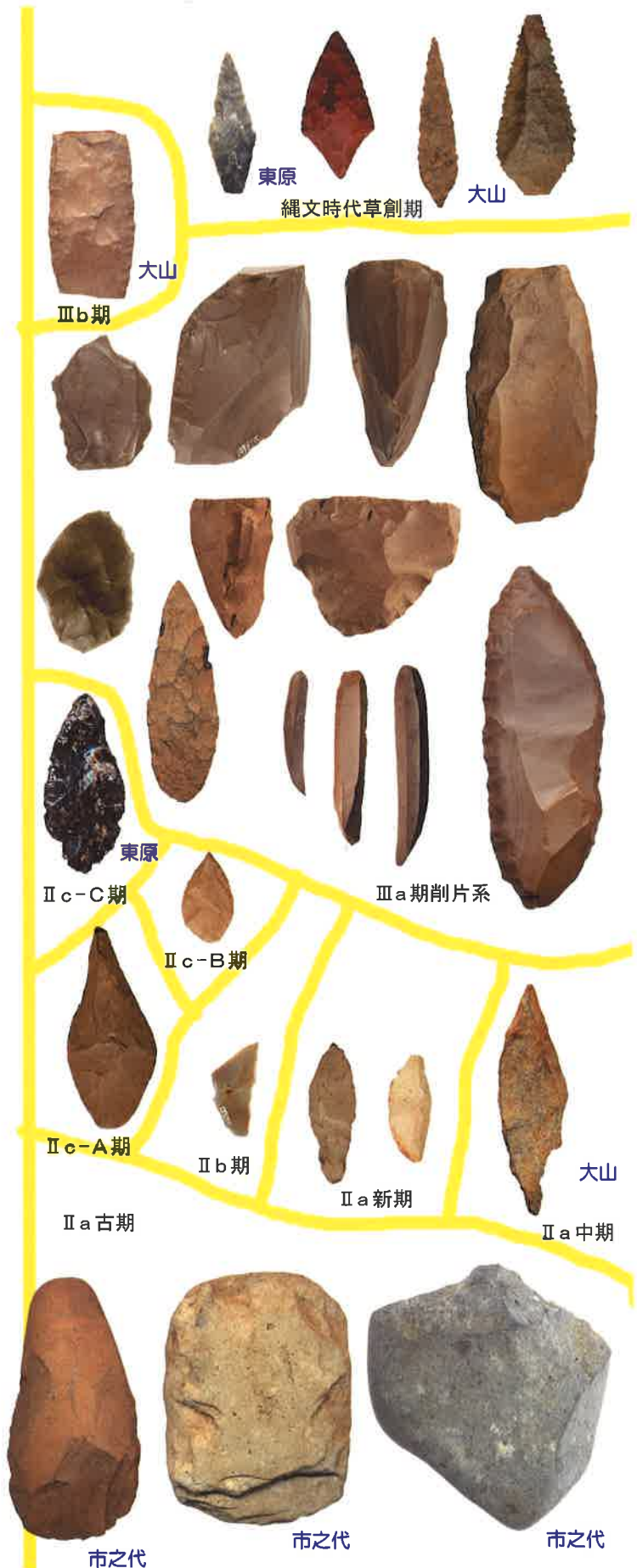
茨城県中央を流れる那珂川の支流である西田川の右岸台地上にある。1999年の発掘調査で関東ローム層第2黒色帯下から鹿沼軽石層の直上までの土層のなかから20点の石器が出土した。石器をつくる材料となった石是那珂川流域で採集することのできるチャートや碧玉が用いられており、石核や剥片など石器作りのときに生じた副産物と石器を作る際に石を打ち割るために使用した台石が出土している。年代はB.C(紀元前)3~2.8万年頃であり、県内の発掘調査でローム層中から発見された石器群の中では最古級である。年代が古いだけでなく当時の石器作りのようすを示す接合資料として貴重な資料である。

寺畑遺跡 (てらはたいせき)

土浦市おおつ野八丁目

十万原遺跡とほぼ同時期と思われ、県内の発掘調査でローム層中から発見された石器群の中では最古級。石器にもちいられた石材には栃木県内を流れる鬼怒川流域の武子川・姿川で採集することができるガラス質黒色安山岩(当時は古鬼怒川が現在の桜川の流路を流れていたため栃木方面のガラス質黒色安山岩が運び込まれたと考えられる)を中心として、流紋岩、珪質頁岩が利用されている。

石器集中地点からは、石核や剥片のほかに敲石(ハンマー)のような石器作りの道具が



出土している。石器集中地点外からは黒曜石製の台形様石器も出土している。その年代はB.C 3～2.8万年頃と考えられ、年代が古いだけでなく栃木方面との地域的つながりを示す資料として重要である。また、本遺跡からは火を焚いたと考えられる炉跡も見つかっており、出土している炭化物の放射性炭素年代測定を実施すれば石器群のより詳しい年代を知ることができるだろう。

中原遺跡（なかはらいせき）

つくば市大字東岡字中原

標高23～25mの花室川左岸台地上にある。1997年～2000年の発掘調査で10ヶ所の石器集中地点が確認された。

最も古い石器は第1調査区の第二黒色帯中部から出土したチャート製のナイフ形石器（刺突具）であり、その年代はB.C 2.7万年頃である。



次の年代に位置付けられるのは、8号石器集中地点と9号石器集中地点であり、刺突具と考えられるナイフ形石器、動物の皮をなめす搔器、ものを切ったり削ったりする削器、楔形石器や剥片、石核が出土している。石材には珪質頁岩や流紋岩、武子川・姿川産のガラス質黒色安山岩、メノウ、硬質頁岩、チャートなどが利用されている。その年代はB.C 2.6万年頃である。

その次に位置付けられるのは1号石器集中地点から4号石器集中地点、6号石器集中地点であり、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、抉入石器、剥片、石核などが出土している。石材には信州産とみられる透明度の高い黒曜石を中心にガラス質黒色安山岩、メノウ、硬質頁岩、チャートなどが利用されている。その年代はB.C 2.5~2.4万年頃である。

7号石器集中地点と10号石器集中地点は、最終氷期最寒冷期に相当する石器群で、搔器や剥片、石核が出土している。石器の石材には栃木県矢板市にある高原山で産出する黒曜石を中心にガラス質黒色安山岩、メノウ、チャート、硬質頁岩、凝灰岩、流紋岩など様々な石材が利用されている。この時期の石器集中地点は県内でも23例しか見つかっていないので、貴重な資料である。年代的にはB.C 2.3~2万年頃の石器群である。

5号石器集中地点は、取手市の柏原遺跡と同時期の削片系細石刃石器群であり、荒屋型彫刻刀形石器や剥片が出土している。石器の石材には東北地方日本海側で産出する第三紀女川層を起源とする硬質頁岩が利用されている。年代的にはB.C 1.3~1万年頃の石器群である。

また、石器集中地点は見つかっていないが、後世の遺構内覆土中から砂川型ナイフ形石器や男女倉型尖頭器、東内野型尖頭器、周縁調整や両面調整の施された槍先形尖頭器なども出土しており、B.C 2.8万年からB.C 1.3万年までほとんど間断なく旧石器時代の人々による土地利用が展開していたことがうかがえる。本遺跡は発掘調査によって時期のちがう石器群が地層や地点を違えて見つかった事例として重要である。

西ノ原遺跡 (にしのはらいせき)

牛久市下根町字西原

標高25mの乙戸川右岸の台地にある。1993年の本発掘調査でB.C 2.6万年頃の石器集中地点が5ヶ所見つかっており、稲敷台地においては最も古い石器群である。石器集中地点からは、基部加工のナイフ

形石器や対向調整の施されたナイフ形石器、石刃、搔器、礫器、石器づくりの際に生じる剥片や石核などが多数見つかっている。

特に第3号石器集中地点から出土した石刃には、下総台地の遺跡に見られる「下総型刃器再生技法」と呼ばれる石刃を折って、折った面から刃部を再生する加工が特徴的に見られ、こうした技法が稲敷台地にも広がりを見せていることが明らかとなった。

石器の石材には黒曜石、ホルンフェルス、黒色頁岩、チャート、メノウなどが利用されているが、その中でも黒曜石が最も多く利用されている。黒曜石は、火山活動に伴い地下から地表に噴出したマグマが火山活動の終息に至るときに急激に冷却され、ほとんど結晶作用をおこなうことなくそのままかたまってできた天然のガラスである。

日本列島には55ヶ所の黒曜石の原産地が知られており、各産地により、透明度や色調、混入物に違いがある。

西ノ原遺跡の黒曜石は、漆黒で透明度が低く、内部に橙色や褐色の混入物が含まれるという肉眼的特徴から、栃木県矢板市の高原山産とみられる。

当時は古鬼怒川が現在の桜川の流路を流れており、古鬼怒川をさかのぼってゆけば高原山へは容易に到達することができた。このように西ノ原遺跡の石器群は年代が古いという点だけでなく、栃木方面との地域的なつながりを示す資料としても重要である。

また、時期は新しくなるが、ガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器や頁岩製の有舌尖頭器も採集されており、縄文時代草創期(隆起線文段階)には狩り場としての土地利用が展開していたことが想定される。

沖餅遺跡 (おきもちいせき)

龍ヶ崎市小柴

標高20mの大正堀川右岸台地上にある。1978年の発掘調査で4ヶ所の石器集中地点が確認された。A群~C群はホロカ型細石刃石器群であり、船底形細石器刃石核や削器、搔器、剥片、石核などが出土している。石材には頁岩、安山岩、泥質砂岩などが利用されている。その年代はB.C 1.3万年頃である。

D群については縄文時代草創期の槍先形尖頭器や黒曜石製の円形搔器が見られ、出土層位もちがうことからA群~C群のホロカ型細石刃石器群とは時期が異なる可能性が高い。

今回は、流紋岩製の石刃石核、珪質頁岩や硬質頁岩製の縦長剥片、硬質頁岩製の削器を展示した。

取手と周辺地域の先土器時代・縄文時代草創期遺跡編年

暦年代 (B.C)	時代/時期	段階/グループ	取手の遺跡	周辺の遺跡
1万～1.2万	縄文時代草創期	押圧縄文	(+)	(+)
		爪形文	(+)	(+)
		隆起線文	柏原	西ノ原
	Ⅲb期 (長者久保・神子柴段階)		大山 I	ひたちなか市後野 A
1.3万～1.4万	Ⅲa期	ホロカ型	(+)	沖餅
		削片系	柏原	中原 5号石器集中地点
		野岳・休場型	(+)	(+)
1.5万～1.9万	Ⅱc期	Cグループ (尖頭器石器群)	東原	中原
		Bグループ (月見野期)	柏原	(+)
		Aグループ (砂川期)	柏原	中原
2万～2.3万	Ⅱb期		柏原	中原 7号※, 10号石器集中地点
2.4万～2.7万	Ⅱa期	新段階	柏原	中原 1, 2, 3, 4, 6号石器集中地点
		中段階	大山 I	西ノ原 1, 2, 3, 4, 5号 中原 8, 9号石器集中地点
		古段階	市之代	中原第 1 調査区
2.8万～3万	I 期		(+)	寺畑 十万原

※は時期未確定, (+) は存在する可能性があるものの, 現在のところ未確認

I 期 (武蔵野台地 X 層並行)

水戸市十万原遺跡 (接合資料), 土浦市寺畑遺跡 (石器・炉址)

Ⅱa期古段階 (武蔵野台地Ⅶ層並行)

ひたちなか市武田西端遺跡 (接合資料, 石斧・ナイフ形石器・台形様石器), 那珂市森戸遺跡 (石斧・ナイフ形石器・台形様石器・大形石核など), 茨城町大畑遺跡 (台形様石器), 石岡市半田原遺跡 (石斧・台形様石器) 土浦市山川古墳群 (石器・炉址)

中段階 (武蔵野台地Ⅶ層並行)

美浦村根本遺跡 (頁岩の石刃製ナイフ形石器), 牛久市西ノ原遺跡 (黒色頁岩の石刃製ナイフ形石器・高原山産黒曜石の円形搔器), 常陸大宮市山方遺跡 (久慈川産珪質頁岩の石刃・石核)

新段階 (武蔵野台地Ⅵ層並行)

つくば市中原遺跡 (信州産黒曜石の石刃製ナイフ形石器), 阿見町星合遺跡 (頁岩の石刃製ナイフ形石器)

Ⅱb期 (武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階並行)

土浦市向原遺跡 (高原山産黒曜石のナイフ形石器, 接合資料), 古河市行屋西遺跡 (チャート製角錐状石器ほか), 坂東市姥ヶ谷津遺跡 (黒色頁岩製角錐状石器, ナイフ形石器)

Ⅱc期 A グループ (「砂川期」)

ひたちなか市武田石高遺跡, 同舟窪遺跡群半分山遺跡, 日立市橋の作遺跡 (水晶製石刃・ナイフ形石器), 北茨城市細原遺跡第 2 次調査, 取手市柏原遺跡 (ガラス質黒色安山岩製有樋尖頭器), 桜川市賀茂遺跡 (黒曜石製有樋尖頭器)

C グループ (槍先形尖頭器石器群)

常陸大宮市梶巾遺跡, 土浦市原田遺跡群 (いずれも尖頭器の製作跡)

Ⅲa期 (細石刃石器群)

削片系 柏原遺跡, ひたちなか市後野 B 遺跡 (ブロック), つくば市中原遺跡 (ブロック)
ホロカ型 日立市宮脇 A 遺跡 (線刻礫もあり), 龍ヶ崎市沖餅遺跡 (ブロック)

Ⅲb期 (長者久保・神子柴石器群)

ひたちなか市後野 A 遺跡 (ブロック), 鉾田市造谷遺跡 (神子柴型石斧), 玉里村宮西遺跡 (神子柴石斧), 鹿嶋市厨台遺跡 (14cm の神子柴型尖頭器), 水戸市下入野 (12cm の神子柴型尖頭器)

縄文時代草創期

ひたちなか市向野遺跡 (無紋土器), 柏原遺跡 (有舌尖頭器)



IIc-C期



西ノ原遺跡 (IIa中期)



寺畑遺跡 (I期)



十万原遺跡 (I期)